

第二回北海道臨床歯科麻酔研究会

日時：昭和62年5月16日（土）午後3：00～午後4：30

場所：きょうさいサロン 札幌市中央区北4条西1丁目 共済ビル

1. 症候群を伴った患者の麻酔経験

納谷康男，遠藤裕一，高田知明
大友文夫，國分正廣，新家 昇
高橋 堯¹，新崎裕一¹

（東日本学園大学歯学部歯科麻酔学講座）

（旭川歯科医師会¹）

心身障害者の麻酔に際し、我々はしばしば症候群を伴った患者に遭遇するが、新しい症候群が次々と報告されている現在、症候群によってはその性格や麻酔管理上の問題点が不確かな場合も少なくない。

今回我々は、歯科治療を目的として来院したアースコック・スコット症候群およびコルネリア・ド・ランゲ症候群の全身麻酔症例を経験したので、その概要と麻酔時の問題点などについて若干の文献的考察を付け加えて報告する。

両症例とも術前検査で血液検査所見に軽度の低値、高値が認められたが、胸部X線写真、心電図などに異常は

なかった。麻酔導入は、酸素、笑気、フローセンをフェイスマスクにて吸入させ、硫酸アトロピン静注後、経鼻的に挿管を行った。術中はコルネリア・ド・ランゲ症候群で頻脈がみられたが、その他、とくに異常は認められず、術後経過も良好であった。

麻酔管理上の注意点として、両症候群とも上気道の変形に伴う気道確保及び挿管困難、四肢の奇形による静脈路の確保困難などが予想される。また、コルネリア・ド・ランゲ症候群では感染に対する抵抗力の減少が考えられており、十分な管理が必要となるであろう。

2. 肝機能障害患者の頻回手術例について

高田知明，工藤 勝，納谷康男
遠藤裕一，大友文夫，國分正廣
新家 昇

（東日本学園大学歯学部歯科麻酔学講座）

肝疾患患者の麻酔において重要なことは、麻酔法や麻酔薬の肝機能、及び肝細胞におよぼす影響を正しく認識することであり、術前、術後の注意深い管理が必要となる。

今回、我々は、重篤な肝疾患を有する患者の全身麻酔ならびにNLAを経験したのでその概要を報告する。

患者は、55才男性で左側頬粘膜腫瘍の診断を受けており、合併症として昭和48年より慢性活動性肝炎の診断を受け、現在も通院、加療中であるが、昭和57年より肝硬変の診断を受けている。また、昭和53年頃より同院にて本態性高血圧の診断下に投薬を受けている。本学口腔外

科にて昭和56年より頻回の腫瘍摘出術を受けていたが、昭和62年4月、腫瘍の再発が見られ、レーザーによる焼却術を受けるため入院した。術前検査においては肝機能の低下が著しく、手術予定時間が短く、浸襲も比較的小さな手術であることを前提にドロペリドール、ペンタゾシンによるNLA変法（アナルゲジア）を行なった。術中特に異常は見られず、術後の経過も比較的良好で、肝機能を憎悪させることなく手術を終了させることができた。

現在、肝疾患患者に麻酔を実施するにあたり、決定的な指針を与えるものはないが、比較的良好な結果を得たので報告する。